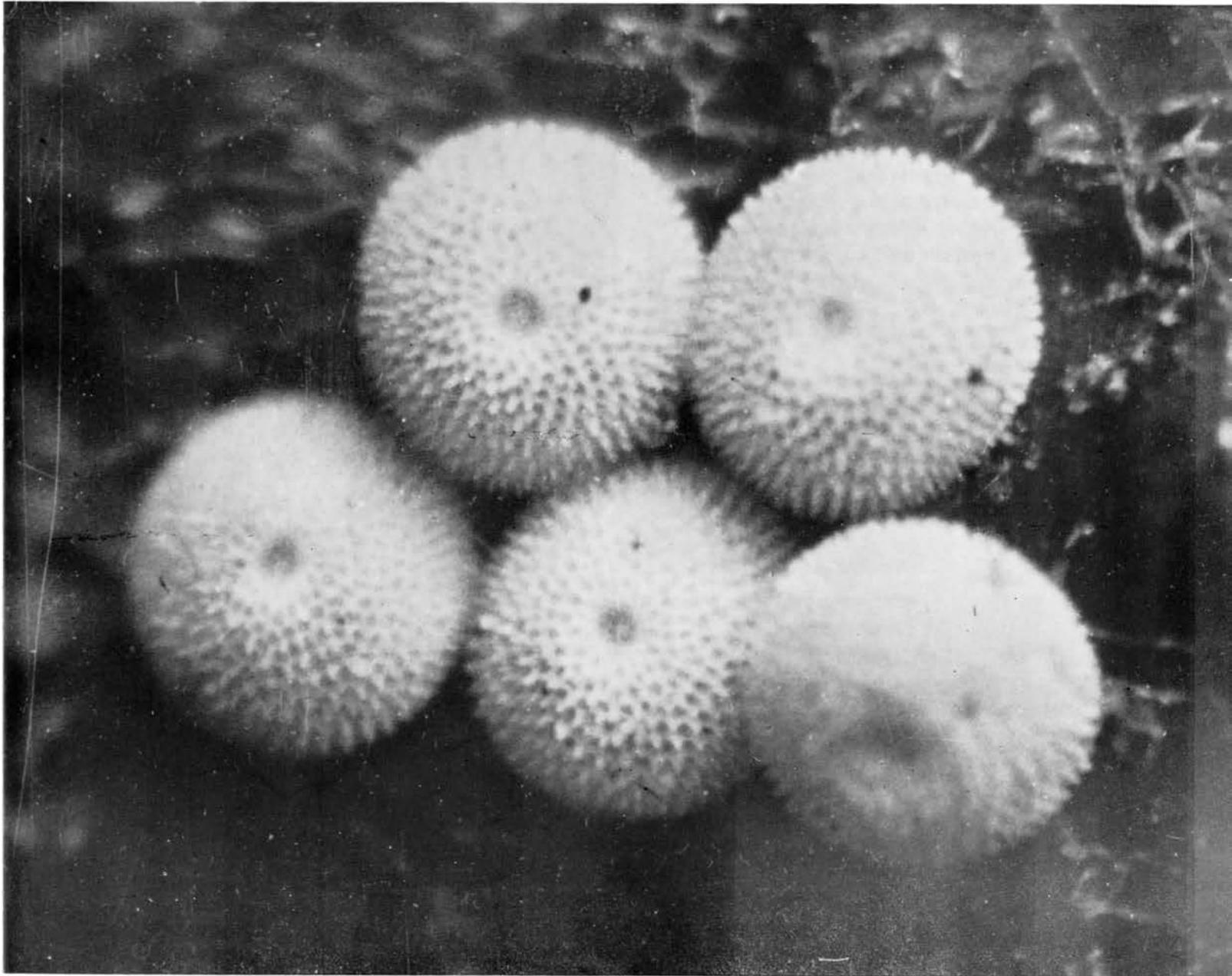


毎月1回20日発行

(昭和31年3月28日第三種郵便物認可)

山と博物館

編集責任者 大町山岳博物館



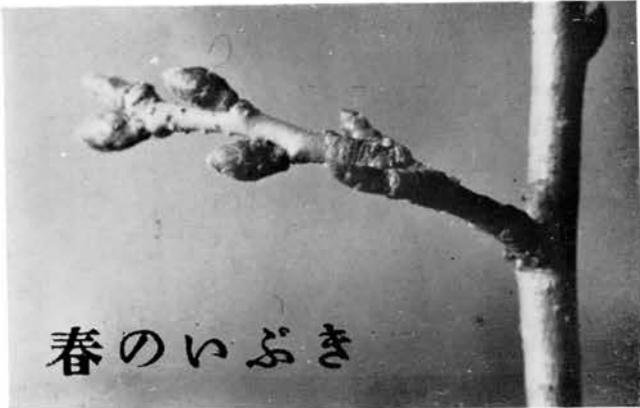
ミドリシジミの卵

初夏の陽光にキラリキラリと輝いて若葉の間を飛び交うミドリシジミの、あのエメラルドのような美しさも、長い冬を卵の殻に閉じこもってじっと我慢しなければ生きてこないであろう。このチョウの卵塊は食樹であるハンノキに産みつけられ、翌春フ化して幼虫となる。

NO. 15

1957年3月20日

大町山岳博物館後援会 発行



春のいぶき

早春の植物

雪の中に開く花

南北に横たわる北アの山脈に接して東方に拡がる盆地—松本平—の北部が大町地方である。古来、安曇（あずみ）と称され古事記には阿曇の字が見られるが元明天皇和同6年5月甲子2日の勅命によって、地名は二字好字を使うべしと仰せられてから安曇の字を書くようになったとも伝えられている。安曇野は信州のなかでも諏訪地方と並んで寒い地方であり、山脈にさえぎられた盆地は大陸性の気候

傾向にさえなっている。生物季節のうえにも大きな特性が見られ例えばサクラ（ソメイヨシノ）の開花日を全国的に比較してみると札幌（5.12）盛岡（4.28）秋田（4.25）仙台（4.19）東京（4.1）新潟（4.15）長野（4.15）大町（4.22）浜松（3.29）京都（4.8）和歌山（4.4）広島（4.1）熊本（3.26）鹿児島（3.31）となり、春



の訪れは東京地方より約1カ月 木枯しの吹きすさぶ真冬でも可憐おくれ、3月も終りになって漸 花をつけるオオイヌノフグリ。く早春のさざしが見えて来る。季節感を大切な要素とする年中行事は東京地方より1カ月おくらすのがならわしであり、3月3日の桃の節句も4月3日におこなわれる。

ハンノキ（カバノキ科）ノボロギク（キク科）オオイヌノフグリ（ゴマノハグサ科）ハコベ（ナデシコ科）など、月おくれの春を待



山間の溪流に、盆地の流れのかたわらに、まつさき春をつけるネコヤナギの花。雌雄異株であり、花が咲き終ってから若葉がでる

ちきれない植物は南に面した日だまりの、斑状に融けた雪の間で花をつける。これらの植物は、生えている部分の雪さえ融けて日中適当の温度が保たれると、寒中でも次々に花をつけてゆく。まさに雪の中で咲く植物といえる。

春をつける植物

安曇野の冬将軍も季節の移り変わりにはかなわない。雪の中で咲く植物も、つける花の数が次第に増えて、硬く芽を護って春を待っていた植物は活動を開始する。ネコヤナギ（ヤナギ科）の硬い芽鱗に包まれていた柔荑花穂は密生した白い絹毛をのぞかせ、鮮片で包んだ上に粘液で保護されているトチノキ（トチノキ科）タラノキ（ウ



ノボロギク。舌状花がなく、草丈20cm内外であり、あまり目だたない。しかし、季節にかまわず年中花をつけている一年生の草本である



フッキソウ。山麓の樹下などに旺盛な繁殖力によって大群生をつくる常緑多年生草。早春から初夏にかけて4枚のガク片だけの花をつける

コギ科)の芽も粘液の分泌がめっきり多くなって近づく春を知らせる。地上や土の中にも昨年秋からじっと春を待っていた数々の越冬生植物がある。ことに早春開花する植物は、殆ど越冬生の植物といえ、セリ・ナズナ・ゴギョウ(ハハコグサ)・ハコベラ(ハコベ)・ホトケノザ(タビラコ)・スズナ(カブ)・スズシロ(ダイコン)などいしえより知られてきた春の七草は、いずれも昨年秋造られた形で越冬した植物である。

君がため春野にいでて若菜つむ
我が衣手に雪はふりつつ

この御歌からも、春の植物が、まだ雪の降るような寒い頃に、もう元気に青々としているという、春の植物の元気な生活力を感じることができる。

とにかく春は希望に充ちている。安曇野に春をつげる植物は、タンポポ(キク科) スミレ(スミレ科) マンサク(マンサク科) フクジュソウ(キツネノボたん科) キクザキイチリンソウ(キツネノボたん科) ホトケノザ(シソ科) ナズナ(アブラナ科) ミミナグサ(ナデシコ科) ツツクソウ(ツゲ科)と次第にその数をまして「草も桜が咲きにける」季節がやってくる。

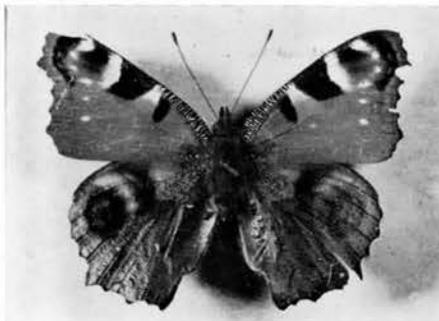


ロゼット状の葉で冬を越すイヌナズナ。



山麓の早春は駆足で通りすぎる。肌をさした鹿島凧(かしまおろし)が和らぐ頃、梅の小枝も赤味が増して、北嶺の壁に黒い縞が見えだすと一輪二輪とほころび始める。春まだ浅い頃に裸の枝についた花は殆ど下を向いて、気候が暖かくなるにつれて横向から上向に咲いてゆく。冷い雨や霜から離れずいや雄ずいを護るためであろうか、まったく自然の姿には無数の深い謎が秘められている。早春の短い麓では春のさざしが見えだすと桃、梅、桜が時を同じくして花をつけ、華やかな春景色を展開する鹿島岳の雪融けを追うように、短い春は更に短くなって山麓から頂上へ進み、高山植物が花をつける山頂では、春と夏が一統になって訪ずれる。(写真は山麓より鹿島岳を望む)

冬にたえた昆虫

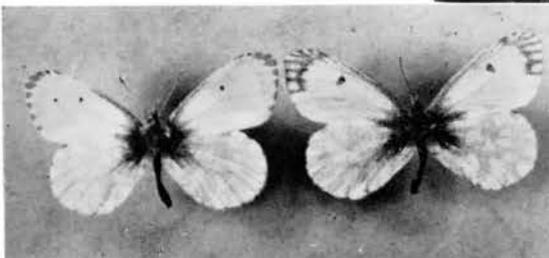


成虫の姿で冬を越すクジャクチヨウ(0.8倍)

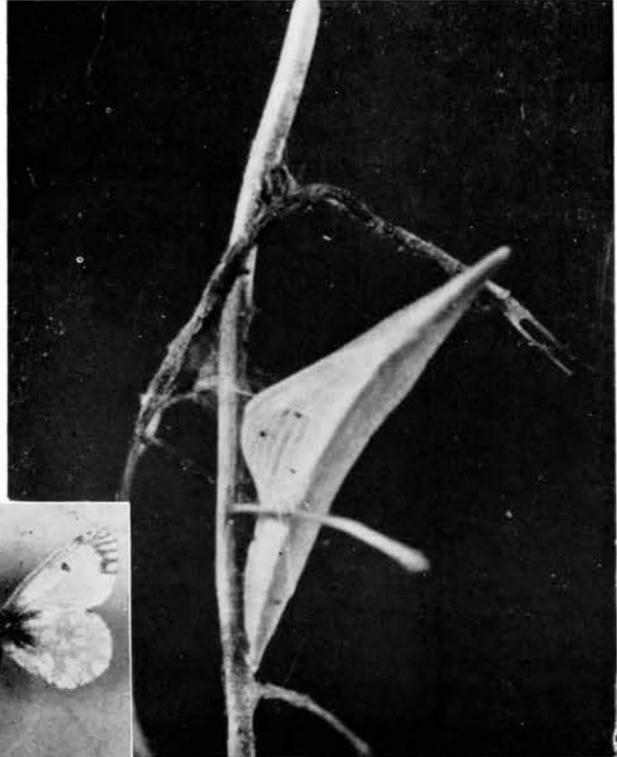
生きものにとって、この寒い冬を如何にして越すかという事は大変な営みなのです。ここに取上げた蝶々たちにしても親虫のままでも春を待つものや、堅い卵の形態にたよるもの、又、グロテスクな蛭や毛虫の形で越冬するもの等様々ですが、越冬場所は比較的暖かで温度変化の少ない所が多い様です。そして、その生命を低温から守るためにそれぞれいっしょうけんめいです。以下、その有様を一つ二つ拾ってみました。

クジャクチヨウ クジャクの羽毛の様な紫色にかまやく輪状紋を持つ美麗種で、北海道、東北地方では平地に産するが中部地方以南では平地から高山帯にかけて出現する。年一回七~八月発生し成虫態で越冬する。越冬場所は落葉の間木の割目、山小舎のヒサシ等を利用する。越冬した雌は四~五月頃現われ、カラヘナ草、イラクサ、ホップ、等の若葉を選んで50~100個づつ産卵し幼虫は真黒で群棲するが、蛹化の時には四散する習性がある。

写真右はクモマツマキチヨウの蛹。飼育中のシャーレの中で食草であるイワハタザオの茎に吐糸して蛹化したもの。体長23mm、色は黄色味を帯びた淡褐色
写真左は成虫(左雄・右雌)羽開長42mm、雄の前ばねの前半は橙黄色。(雌はこの部分白色)



クモマツマキチヨウ 有名な高山蝶の一種でその清楚な美しさは、採集家達に珍重されているが、近年海拔500m以下の地域にも多く発見される様になり、その位置がぐらついて来た感がある当地方では5~6月頃1000m附近の溪畔に少数出現し、イワハタザオの花穂に産卵する。幼虫は花や果実を食べ約40日間で蛹化しそのまま翌春に至る。越冬場所については、今だ野外でのものに確定的な記録がない様であるが、飼育した場合は写真の様に食草の茎に懸垂を営む。なお高山帯に於ける本種発生は七月一ぱいの模様である。





春のよろこび

3月も末ともなれば、北アルプスの山麓にも希望の季節がやってくる。山はまだ真っ白だ。そしてこの山稜をこえてくる風はたしかに冷い。だが子どもたちは元気だ。枯草の上にねそべて新しい若芽の匂いをなつかしみながら白い山なみを眺める彼等にはデツカイ夢が湧いてくるのだろう。消え残る雪のきわにはフキのとうが頭をもたげている。春の七草も今が摘み頃。セリ摘む少女の声がはずむ。野草を摘んで食せんに供するとは、いつの世からのならわしなのか。いやむしろ原始のなごりであろうが、今年も春はもうここまでやってきている。



早春の小川にセリを摘む少女たち

(今月の寄贈) クロッグミ 1体 大町市八日町内山政次郎、カルカモ 1体 大町市八日町山田時司、ウミネコ 1体 大町市平海ノ口平林幹嘉、ダイサギ 1体 南安有明村立足腰原弘光。

【博物館だより】 2月24日自記雨量計取扱講習(東京明石製作所吉原氏) 「白い山脈」宣伝 26日「白い山脈」上映打合せ 3月1日館章図案到着(東京応用美術社鈴木氏) 2日「白い山脈」上映係員打合せ 6日~11日「白い山脈」上映 18日東京教育大学自然教育同好会員受入れ打合せのため内山主事上京 19日「白い山脈」上映反省会

【動物園だより】

ホンダタヌキ



普通はタヌキ或はムジナなどと呼ばれている日本特産の動物で、学問上食肉目イヌ科に属し、本州、四国、九州の山野に分布しており、北海道には別亜種のエゾタヌキが棲息している。イヌ科の動物としては珍らしく木に登ることができ、カキ、ビワの果実類を好食し、外にネズミ、ヘビ、カエル、昆虫なども喰べる。3月頃交尾し、約62日で普通6子を分娩する。夜行性で夜明けに多く歩き

まわり低い声でオイ、オイなくと言われ、ギャア、ギャアともなく

おしらせ 本紙の購読を御希望の方には実費 1部10円でお届けします。但し遠方の方は郵送料の実費をいただきます 大町山岳博物館後援会

山 岳 会 長野県大町市

呉羽紡績大町工場山岳部



昭和21年設立、北アルプスの麓の工場であるためか、山の好きな人々の集いから、遂次備品なども充実し、当工場内でも部員数、活動とも最も大きい。昨年来から単なる集団登山方式から技術面での高度化が要求され、

常に平地訓練を行なっている。女子だけの鹿島連峰(旧後立山連峰)全山縦走など女子部員の活躍には目ざましいものがある。

昨年一年間、本館を基地にして、北アルプスに長期ロケを続けて来た「白い山脈」は文部省の特選となり、日本ではじめての長篇記録映画として大変な好評をもって迎えられた。ところが日本哺乳動物学会から三月十三日文部省に対して「有益な作品だが、動物の生態に誤りがあり、教育上に悪い影響がある」という意味の要望書が

送られた。▲この映画は最初から「長篇記録映画」と銘打って発表されただけにフィクション(虚構)の限界や事実のあやまりをめぐって、きびしい批判の※

「白い山脈」の波紋

※声がまき 起ったのである。生物記録映画といえども、相手が生きている生物であってみれば、そう簡単にすじ書きどろりには撮影できない。自然の真実をとらえ易くするようなフィクションは許されねばならない。ただ要



はそのように手を加えることによつてどこまで真実をとらえ得たかということである。▲「白い山脈」の中には博物館の案内によつて撮影したものをはじめ、すばらしい自然の描写が盛られているが、ライチョウのダンスの場面のような大衆に受けるために作画的にや

イワギキョウと解説されたチシマギキョウ。 たぎこちない演出があつて、事実上の誤りをおかしている点が多い。このことを裏書きするように大映常務松山英雄氏は「『白い山脈』はアルプスという大自然を舞台に、そこに住む動植物を主役にした處映画であり、商業映画である」と云っている。(週刊朝日 3月24日) ▲キクザキイチリンソウをシコタンハコベといい、オオシラビソの実をハイマツの実であると解説するなどのあやまりは、我々に解説の原稿と写真とを比較して見られる機会を与えてくれたならば当然防げたことである。それはともあれ、演出による撮影を自然のままの実写であると公表している撮影隊の態度(平凡出版社「白い山脈」・文芸春秋四月号)はまことに困ったものである。

山 と 博 物 館

No. 15 1957.3.20発行

編集 発行人

大町山岳博物館

発 行 所

大町山岳博物館後援会

印 刷 所

長野県大町市神楽町電話211番

信州印刷株式会社